



東京部会(第144回)記録

日時:	2025年4月26日(土) 15:00 - 17:00
場所:	連合会館(お茶の水) 403会議室
参加者:	会場11名、zoom14名、計25名

(1) 杉田孝之先生(千葉県立津田沼高等学校)から、春の経済教室の総括が報告された。

事前に講演者の松島先生との面談、実践発表者と数回にわたる報告の検討を行なったこと、当日は会場43名、オンライン30名、計73名で、学年末の時期としてはこれだけの参加は成功であったこと、内容もこれまでにない講演とその後の実践報告の一貫性があり質の高い内容であったことなどが報告された。

今後も先生方の知的ニーズがどのようなものかリサーチして、企画をたることが求められるとの総括がなされた。

(2) 杉浦光紀先生(東京都立新宿山吹高等学校)から、「社会的共通資本を扱う授業を考える」の報告があった。

夏休み経済教室での高等学校の部の実践報告授業の構想の報告である。春の経済教室での松島先生の提起を受けた授業構想で以下のような内容を想定しているとのことである。

おおよそのあらすじとして、共通テストの宇沢文章の紹介を導入としたうえで、①豊かな社会の条件は何か、②市場でのやりとりのメリットは何か、③市場でうまくゆくための条件は何か、④公共財が提供されれば問題は解決か、⑤公共財＝善にならない場合はどうするか高速道路問題を挙げて考察させる、⑥宇沢社会的共通資本の視点から現代社会を捉え直すとうなるか、⑦あらためて豊かな社会とはなにか、という構想が紹介された。

これまでの経済の授業の観点との違いとして、社会正義の視点をいれる点、市民的権利から考えさせる点、市民的自治の視点をいれる点をあげて、社会参画の視点もくわえた授業としたいとのことであった。

検討では、授業時間の配分はどうなるか、共通テストの使い方のアドバイス、市場の失敗ではなく社会的共通資本を使うオリジナルな部分はどこか、高速道路問題を取上げているがそれと社会的共通資本との関係はどうなっているかなどの質問がだされ、それぞれ杉浦先生から回答があった。また、関谷文宏先生(筑波大学附属中学校)から、社会的共通資本がなかったらどうなるかという問題設定でのAIによる展開事例が紹介された。

(2) 仙田健一先生(新潟県糸魚川市立糸魚川中学校)「地方における金融の在り方の追求を目指す社会科授業ー地域金融機関とフィンテックに着目してー」の報告があった。

夏休み経済教室での中学校での実践事例の準備報告である。実践は、前任校の上越教育大学附属中学における社会科と総合学習でのものである。

授業は全14時間を使い、1時間目に人生に必要なものとして金融の関わりを学び、2時間目に地域金融機関の種類と役割を理解し、3～5時間目には金融機関への調査と地域金融の意義を学び、6時間目に各金融機関の共通点を理解し、7時間目に投資や融資の仕組みを学ぶというのが前半で、後半の8時間目は金融研修として日銀、証券取引所見学を行い、9時間目に銀行の合併と地域金融の役割を考え、10時間目に都市銀行と地域金融機関を比較し、11～12時間目に地域金融機関と新しい金融技術の活用をグループで発表、13時間目に地域金融機関の未来像をまとめ、14時間目は学習の振り返りというものである。

この授業を通して、相互扶助の観点から地域金融機関の重要性と具体的な役割の理解が進んだことが事前と事後のアンケートと記述例から紹介された。

検討では、14時間の社会科と総合の配分はどうなっているか、なぜ地方金融機関に焦点をあわせたか、都市



銀行と地方金融機関の比較のデータの集め方や分析方法はどのようなものか、授業評価方法としてルーブリックを使ったか、9 時間目の学びが重要ではなかったか、クラウドファンディングと地域金融機関の関係は、などの質問がありそれぞれ回答があった。篠原代表からは、金融の本質を学ぶ授業か、金融機関の役割を学ぶ授業なのかを焦点化すると良い。金融の理解には、金融機関の業務を知ることが生徒に一番伝わるので、それを探らせると良いというアドバイスがあった。また、佐藤英司先生(福島大学)からも、地域経済の活性化の授業か地方銀行の役割の授業かを明確にしてプラッシュアップすることを期待するとの発言があった。

(4) 市川慶太先生(埼玉県さいたま市立白幡中学校)から「経済視点で考える近世:江戸時代」の報告があった。

これも夏休み経済教室の実践報告のための準備報告である。

夏の教室のテーマの VUCA について、変化が激しく、将来の予測が困難な状態と定義した場合、このような時代だからこそどんなに時代が変化しようと変わらないもの、変わりづらいものに気づくことが重要として、それを歴史学習にあてはめて実践したということの紹介があり、近世で経済的な視点入れた授業の紹介があった。

経済教育との関連では、江戸幕府の対外政策と金銀の産出と流出、江戸中期の貨幣改鑄と物価の関係、幕府の財政と経済の関係性、経済の安定と文化の発達の中の四つの視点を導入した授業とのことであった。

近世(戦国から江戸時代)は 14 時間の配当で、それを大きく、①ヨーロッパ人との出会いと天下統一、②江戸幕府はどんな方法で平和な世の基盤を築いたのか、③なぜ 18 世紀に改革が続いて行われたか、その成果は、④なぜ、平和な時代が続いたのににもかかわらず、江戸幕府は滅亡したのだろうかの 4 部に分けて学習するというものである。(プリントを用意されていたが、通常の会場でなかったため、印刷、配付が間に合わなかった。)

この授業を通しての生徒の経済の知識や概念の理解度を、テスト問題を通して分析した紹介があった。それによると、吉宗、田沼、松平のそれぞれの政策をレーダーチャートにしたものを選択させる問には 80%の正答率があったが、二軸のチャートにしたものの判別だと 61%になり、同じものを文章にして選択させると 45%になり、江戸時代の人口と経済の言葉を使って図表をもとに記述させると 21%になるということであった。

検討では、江戸時代の経済成長が分かる根拠は何か、江戸時代の不易とはなにか、不易を強調すると基本的に「社会の安定」「現状の社会秩序の維持」を主要目的としていた時代の学習として適切かどうか心配、江戸時代の幕府の政策の影響力はどこまであったか、生徒のテストでの二軸チャートはこれで理解できるかななどの質問があり、それぞれ回答があった。関谷先生及び篠原代表からは、江戸時代は幕藩体制であり、経済の点では各藩バラバラでそれを踏まえて経済理解も必要となるとの指摘があった。

(5) 最後に、夏休み経済教室に向け、東京証券取引所の吉村慈子氏より、開催のアピールと、印刷準備の関係から登壇者の配付資料の原稿締め切り厳守の要請があった。

(6) 今回の東京部会は、ウェブ参加者から zoom のチャット機能を使った質問、資料の提供などもあり、鋭い疑問や活発な質疑が行われた。夏休み経済教室に向けてのよいスタートとなる部会であった。

以上 記録・分析:新井

次回開催予定:6月21日(土)15時00分~17時00分

場所:慶応義塾大学三田キャンパス

内容:夏休み経済教室の報告準備、授業実践の報告、検討など